

第3 問題作成部会の見解

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 高等学校学習指導要領では、外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの知識を、実際のコミュニケーションにおいて、目的や場面、状況などに応じて適切に活用できる技能を身に付けるようにすることを目標としていることを踏まえて、4技能のうち「読むこと」「聞くこと」の中でこれらの知識が活用できるかを評価する。したがって、発音、アクセント、語句整序などを単独で問う問題は作成しないこととする。
- 「リーディング」「リスニング」とともに、ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）を参考に、各CEFRレベルにふさわしいテキスト作成と設問設定を行うことで、A1からB1レベルに相当する問題を作成する。また、実際のコミュニケーションを想定した明確な目的や場面、状況の設定を重視する。
- 「リーディング」については、様々なテキストから概要や要点を把握する力や必要とする情報を読み取る力等を問うことをねらいとする。表記については、現在国際的に広く使用されているアメリカ英語に加えて、場面設定によってイギリス英語を使用することもある。
- 「リスニング」については、生徒の身近な暮らしや社会での暮らしに関わる内容について、概要や要点を把握する力や必要とする情報を聞き取る力等を問うことをねらいとする。音声については、多様な話者による現代の標準的な英語を使用する。
読み上げ回数については、英語の試行調査の結果や資格・検定試験におけるリスニング試験の一般的な在り方を踏まえ、問題の数の充実を図ることによりテストの信頼性が更に向上することを目的として、1回読みを含める。十分な読み上げ時間を確保し、重要な情報は形を変えて複数回言及するなど、自然なコミュニケーションに近い英語の問題を含めて検討する。全ての問題を1回読みにする可能性についても今後検証しつつ、当面は1回読みと2回読みの両方の問題を含む構成で実施することとする。
- グローバル人材の育成を目指した英語教育改革の方向性の中で高等学校学習指導要領に示す4技能のバランスの良い育成が求められていることを踏まえ、「リーディング」と「リスニング」の配点を均等とする。ただし、各大学の入学者選抜において、具体的にどの技能にどの程度の比重を置くかについては、4技能を総合的に評価するよう努めるという「大学入学共通テスト実施方針」（平成29年7月）を踏まえた各大学の判断となる。

2 各問題の出題意図と解答結果

- ・ 第1問は、英語の特徴やきまりに関する知識・技能（特に文構造及び文法事項）に基づき、身の回りの事柄に関して平易な英語で話される短い発話を聞いて、必要な情報や、発話内容の概要や要点を把握する力を問う。日常的な内容の文を聞いて、内容が合っている選択肢（セクションAでは文、セクションBではイラスト）を選ぶ問題である。
多くの受験者は、本大問で問われている力を身に付けていると考えられるが、問6のように、anotherが指すものが何かをイラストを見ながら考えて判断することを求められるような設問は難易度が高かったと思われる。このことから、受験者の中には個別の単語は聞き取れているものの、発話全体の意味を正確に理解するための実践的な文法力において弱点のある者もいることが示唆された。

- ・ 第2問は、身の回りの事柄に関して平易な英語で話される短い対話を、場面の情報とイラストを参考にしながら聞き取ることを通じて、必要な情報を把握する力を問う。日常的な短い対話を聞いて、設問に対する答えをイラストから選ぶ問題である。

多くの受験者は、文脈が与えられ、対話の中で必要な情報が分散して示されていること、また選択肢がイラストであることを十分に利用しているようであった。しかしながら、問11については、イラストと表示の情報と、聞いた情報を組み合わせる作業が難しかったのではないかと考えられる。

- ・ 第3問は、身の回りの事柄に関して平易な英語で話される短い対話を、場面の情報を参考にしながら聞き取ることを通じて、概要や要点を目的に応じて把握する力を問う。日常的な対話を聞いて、対話内容に関する設問の答えとなる選択肢を選ぶ問題である。対話は言語の機能（例：依頼、誘い、感謝等）を軸に作られており、小問6題のうち、今回は問13と問16をイギリス英語による発音とした。

問17では、最後まで対話をしっかり聞かないと正答が選べないようなものとなっており、全体としての難易度は高くなった一方で、人を助けるという身近な状況設定であり、識別力のある問題となった。

- ・ 第4問Aは、必要な情報を聞き取り、図表を完成させたり、分類や並べ替えをしたりすることを通じて、話し手の意図を把握する力を問う。大学の授業でキャンパス設備についての話を聞き資料のグラフを完成させる設問と、フィットネスクラブの料金プランの説明を聞き表を完成させる設問から成る。

グラフを完成させる最初の問題は、グラフを理解し、聞き取った内容を使って完成させるという複合的作業のため、解答する時間も昨年より長めに設けたが、依然として難しいと感じる受験者が多かったとみられる。

第4問Bは、複数の情報を聞き、最も条件に合う選択肢を一つ選ぶことを通じて、状況・条件に基づき比較して判断する力を問う。ここでは、国際会議の会場を決めるために4つの候補についてのスタッフの説明を聞き、考えている条件に合う設備を持った会場を一つ選ぶ。四人の話者のうち、一人はイギリス英語、一人は日本語母語話者による英語の発音とした。

本問題では、国際会議の会場候補の施設にかかわる語彙が用いられ、母語の異なる話者が英語である程度の情報をまとめて話すなどしたが、受験者は事前の与えられた情報を利用したり、メモ欄を活用したりして、対応したと考えられる。

- ・ 第5問は、身近な話題や知識のある社会的な話題に関する講義を聞き、メモを取ることを通じて概要や要点を捉える力や、聞き取った情報と図表から読み取れる情報を組み合わせて判断する力を問う。ここでは、美術館のデジタル化についての講義を聞く。講義を聞いて、内容理解・情報整理・論点把握をし、更に講義内容と図表情報を統合することが求められている。

試験の中でも最も難易度が高いと考えられる第5問は、複数の情報を統合し、整理する力が中心的に問われている。昨年度と同様、能力の識別力が高かったと判断される。

- ・ 第6問Aは、身近な話題やなじみのある社会的な話題に関する会話や議論を聞き、話者の発話の要点を選ぶことを通じて、必要な情報を把握する力や、それらの情報を統合して要点を整理し、判断する力を問う。ここでは、旅行にどんなカメラを持っていくかについて意見交換をする二人の会話を聞いて、会話の趣旨を判断する。

ある程度の長さを持った議論ではあるが、想像しやすい内容であったためか、多くの受験者は、情報把握や要点整理が十分にできたと思われる。

第6問Bは、身近な話題やなじみのある社会的な話題に関する会話や議論を聞き、それぞれの

話者の立場を判断し、意見を支持する図表を選ぶことを通じて、必要な情報を把握する力や、それらの情報を統合して要点を整理、判断する力を問う。ここでは、四人の学生が卒業研究を単独で行うかグループで行うかについて意見交換している様子を聞き、話者の立場を判断する。

本大問では話し手が多く、また、議論の中でそれぞれの立場を捉えるという負荷の高い問題ではあったが、話題が受験者になじみがあったことに加え、四人の話者の区別がつきやすかったため、それぞれの話者の意見をしっかりと理解できた受験者が多かったと考えられる。全体としては、成績上位の受験者層について識別力の高い問題と言える。

3 出題に対する反響・意見等についての見解

本テストについて、教育研究団体からは、「今年度も『知識の理解の質を問う問題や、思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる問題を重視する』という共通テストの問題作成方針がしっかりと反映されたものとなった」との評価を受け、「丁寧に準備した受験者にとっては、十分な対応ができたと考えられる。」との意見を受けた。また、第4問以降で扱うトピックの選択の工夫についても肯定的な評価を受けた。

また、高等学校教科担当教員からは、「学習指導要領と整合している」との評価を得た。また、「多様な話者による英語が使用されている」ことも、高く評価された。高等学校教科担当教員からの要望と同じように、思考力・判断力・表現力等を必要とする、話者の意図、含意と文脈、内容理解を問うような問題、受験者が既存の知識や体験などと関連づけて理解できるような話題や身近な暮らしや社会での暮らしに関わる題材で、日常生活で用いられる自然な表現を示せるような問題の作成を続けていきたい。

一方で、出題に関して幾つかの指摘もあったが、以下に主な意見とそれに対する問題作成部会としての見解を述べる。

- ・第1問については、日常的なトピックが用いられているが、例えば問7で見られるような、道を見知らぬ他人に尋ねるという設定は、時代の変化とともに起こらなくなっている（それよりもネットなどで調べる）のではという指摘があった。今後の問題作成で留意していきたい。
- ・第2問については、イラストやピクトグラム（ここでは問11など）がやや分かりにくいとの意見があり、分かりやすいイラストの作成について今後も慎重に取り組みたい。
- ・第3問については、イギリス英語の会話が始まることに対して、受験者は慣れてきたと考えられるものの、問13ではイギリス英語で一般的な表現（pound, postageなど）がなじみのないものであったのではないかという指摘を受けた。英語変種のタイプを選ばない一般的な表現を用いるよう心がけ、受験者が取り組みやすいより自然な状況設定に注力することとしたい。
- ・第4問については、問18～21について、大学生活を想像して身近に感じられる好ましいトピックであるという評価があった。その一方で、聞き取る内容については、聞き手の理解に配慮してもっと分かりやすい言葉を使うようにとの改善を要望された。また、選択肢の順番に聞き取るように設定することについても提案があった。これについては、今後も引き続き留意したい。問26については、必要な情報を探すという日常でよくある作業をさせるようなものになっており、良問であるとの評価を受けた。
- ・第5問では、テクノロジーを使って美術館を楽しむことができるようになった今の時代に合う良いトピックであると評価された。一方で、聞かなくても解けるような箇所もあったという指摘もあり、これについては、すべてを聞かないと解けない問題の作成を今後も目指すこととする。

・第6問については、それぞれの卒業研究での目的の違いと、それぞれの利点を話し合う点が興味深く、身近で理解がしやすい話題であると評価を受けた。問36の人数を問う設問は、これまでの共通テストと同じ型の問題であったが、本試験の問題のように該当者の組合せを選ぶ問題の方が望ましいのではないかと指摘を受けた。その場合、選択肢の数を6程度に増やす方が良いのではないかと指摘もあった。これについては、トピックや聞き取る内容とも関連すると考えられるため、今後も引き続き最善の設問となるように検討を続けたい。

全体に、身近な暮らしや社会での暮らしに関わる題材で、日常生活で用いられる自然な表現を採用し、また高校や大学生活等におけるコミュニケーションの場面や話者の多様性を想定する中で、場面設定や状況を把握しやすいテキストを希望するとのことであった。また、前述のように、社会の変化に伴い、昨今ではあまりないと思われる、見知らぬ人に道を尋ねる状況や、高校生には余りなじみのなさそうなトピックは除き、試験問題を通して受験者が興味を持ち、考える機会が持てるような題材も良いのではないかと指摘も受けた。今後の参考にさせていただきたい。

また、多様な話者による英語の導入に関しては、国際的に広くコミュニケーションの手段として使われている実態を反映しており、大変良い傾向であり、もっと多様な種類の話者の英語を取り入れてもいいのではないかと指摘もあった。これについても参考にしていきたいと考えている。

4 ま と め

本テストは、センター試験に比べ、より4技能のバランスを意識し、場面設定などを日本語で表記することで、測る力を「聞く力」に絞る措置をとった。また、モノログ、対話、講義、四人の討論といった様々な場面や状況を設定し、学習指導要領の方針を汲んだものとした。英語の多様化についても一定程度体現化できたと考える。こうした方向性については、今後も継続していきたい。

共通テストの高等学校の授業改善へ及ぼす影響が大きいことは、高等学校教科担当教員からの見解でも示された。生徒各自が、コミュニケーション・ツールとしての英語を体験できるような授業や指導の在り方を模索していくべきであるという見解は、問題作成部会も同じ思いである。

教育研究団体からは、テストが思考力・判断力・表現力等を問うことを目的としながらも、情報処理能力や処理速度だけを問うような問題設定となってしまうような問題作成を引き続き心がけてほしいと要望を受けた。一方で、実際のコミュニケーションの場では、ある程度即時的に対応することが求められており、このような力もリスニングにおける基礎力を成すものと考えることが必要である。聞き取ったことを瞬時に理解・解釈できるようなリスニングの流暢性の力を高めるような学習にも引き続き力を入れてほしい。共通テストが引き続き、様々な場面で「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」につながる波及効果があるものとなるようにこれからも尽力していきたい。